

平成14年度第3回12月4日

演題：多重人格スペクトラムと Imaginary Companion

演者：赤堀 薫子（保健科学部）

多重人格 Multiple Personality — DSM-IV では解離性同一性障害 (DID: Dissociative Identity Disorder) — という名のもとに括られている症例の報告は近年わが国でも増加しているが、これらは果たしてすべてが同一病態の疾患群なのであろうか。

実際の解離性障害患者の臨床場面では、DID と診断されるような患者の示す「交代人格」様状態の少なくとも一部は Imaginary Companion (IC) ないしはそれに類似した患者の想像上の産物であり解離現象とは異なるのではないかと考えられ、DID の診断基準を満たす病態にはいくつかのサブタイプが存在する可能性がある。

ここでは具体的に4症例を提示し、交代人格と imaginary な創造物の違いについて症例にそって検討を加えた。

〈症例提示〉症例1の麻由美（16歳女性）は、マンガ的な交代人格様状態を自らの不安や怒りの増強に合わせて次々と創り出した。記憶が飛ぶ、感情のコントロールができない、過食・嘔吐、過換気発作などを主訴に来院した症例2の杏子（22歳女性）は、他の人格状態時の記憶がなく、同棲中の恋人によってのみそれらが目撃されていた。症例3のA（21歳女性）は現在の恋人と付き合いだしてから他人格が出現し、診察場面や恋人と喧嘩をするといった不安状況で幼児人格になった。症例4のB（25歳女性）は、15歳以前の記憶がほとんどない。日常の記憶にも欠損が多く見られ、それを知的に何とか代償している。

〈考察〉症例麻由美では、各「人格」間の障壁はゆるく、本人にとって願望充足的な登場の仕方をしており、概ね「主人格」のコントロール下にいる。洞察的な精神療法によって廃用萎縮的に他「人格」の勢いが収まっていくあり方からも、解離機制と別の imaginary な創造物であることが示唆されていると思われる。症例3の「交代人格」についても同様のことがいえる。症例4では、現在のところ交代人格の存在は明らかではないが、多重人格の病理を考えるうえで非常に興味深い症例である。Watkins らは自我状態 Ego States という概念を用いて解離連続体についての仮説をたてている。Bは、例えば学会発表のときなどの冷静で強気な自分が「自分である」という自己同一性の意識は持っているが、自

分が知らないはずの知識を口が勝手に話すという解離現象がしばしばみられる。Bというシステムにおいては、自我状態間の境界が多重人格ほどまでではないにせよ、かなり強固であるために、それぞれの自我状態の独立性が高いのだと考えると、このような現象を説明しやすい。症例1や3において「交代人格様状態」が自分の存在をアピールするような現われ方をしているのに対し、症例2、4ではむしろ異なる状態を隠そうとするという違いがある。特に症例4では、境界の強固な自我状態が存在するために起こる記憶の欠損を何とか埋めようとするための努力や、健忘を周囲に気付かれないためのごまかしの試みが日常的に行われており、症例1、3の Imaginary Companion 的な状態のあり方との病態の違いが明らかである。このような境界の強固な症例においては、洞察的な精神療法アプローチは非常に困難であるという印象がある。

従来の報告の中で多重人格／DID とされてきた症例の中にも IC 例が多数含まれていた可能性があるが、IC は解離スペクトラムとは別の病理現象であると考えられる。真の交代人格との区別を十分に行うことは病態理解の上でも治療戦略の上でも意味があるのではないかと思われた。